

「清」から「不清」へ

——新しい叙情歌の形成——

小野寺 静子

序

万葉集中には形容詞「きよし」が八七例ほど、「さやけし」が二九例ほど（ただし、いずれも埤本万葉集の読み方による）みえる。「さやけし」には、類義語の副詞「さやかに」「さやかに」「まさやかに」の例が一五例ほどみえる。「きよし」は「伎欲吉」「藝欲伎」「吉欲伎」などの仮名書き例を除くとそのほとんどは、「清」で六〇例を数える。中に「浄」が六例、「不穢」が一例あり、清潔さ、水の清らかさ、けがれの無い、

「清」から「不清」へ

きたなくないものといった意味をもたせていたことが、その用字からうかがうことができる。「さやけし」も「左夜気久」「佐夜気久」などの仮名書き例を除くとそのほとんどは「清」で一九例みえ、中に「清明」、「清潔」、「明」、「亮」、「浄」がそれぞれ一例ずつあり、清く明かであること、水が澄んで透き通っていること、汚れがなく清らかなこと、明白な清らかさ、明かなことといった意味をもたせていたといえる。「きよし」も「さやけし」も六五%にのぼる表記が「清」であることから、万葉集で「きよし」と「さやけし」

は共通する意味をもたせていたことが伺われ、その違いを明確に指摘しがたい。が、両者が別語として用いられる限り、違いがあるはずであり、その違いは高野正美氏によれば、「『さやけし』は主観的、具象的で情感を表わすことばとして、一方、『きよし』は客観的、抽象的で状態を表わす場合に多く用いられている」という（「新しい自然の発見」『万葉集作者未詳歌の研究』）。万葉集の「きよし」「さやけし」の多くは自然の賛美表現として用いられる。これは「清明心」という古代特有の価値観と分かちがたくある賛美性であろうが、万葉集中には、自然が「きよし」や「さやけし」で形容されない、すなわち、清澄とは言いがたい、おぼろなといった語で形容されるようになっていったものがあることも事実である。そこに、どのような新しい自然と心情がকাশし出されてきた、といえるのであろうか。本稿ではそういったことを考察してみた。

一
万葉集中の八七例に及ぶ「きよし」の例は、時の流れとともにその使われ方が変質していつているだろうから、そのあたりのことを無視して述べることはできないであろうが、ここでは、「きよし」がどのような場、どのような作歌事情で用いられてきたかに焦点をあててみていきたい。

一、行幸歌にみえるもの（各句ごとに一字あけているものは長歌の例である。以下同じ。）

「山川の 清き河内と」（一・三六「幸_二于吉野宮_一之時柿本朝臣人麻呂作歌」）

「山川を 清みさやけみ」、「吉野の清き河内の激つ白波」（六・九〇七、九〇八「養老七年癸亥夏五月幸_二于芳野離宮_一時笠朝臣金村作歌」）

「沖つ島 清き渚に」（六・九一七「神龜元年甲子

冬十月五日幸_二于紀伊国_一時山部宿祢赤人作歌_一

「川の瀬の 清きを見れば」(六・九二〇「神龜二

年乙丑夏五月幸_二于芳野離宮_一時笠朝臣金村作歌_一)

「娘子らは赤裳裾引く清き浜辺を」(六・一〇〇一

「春三月幸_二于難波宮_一之時歌_一)

「川速み 瀬の音ぞ清き」(六・一〇〇五「八年丙

子夏六月幸_二于芳野離宮_一之時山辺宿祢赤人応詔作
歌_一)

「田跡川の瀧を清みか」(六・一〇三五「大伴宿祢
家持作歌_一)

二、行幸と明示されていないが行幸に準ずる場での
もの

「清き川原を 見らくし惜しも」(六・九一三「車

持朝臣千年作歌_一)

「川なみの 清き河内そ」、 「清き川原に千鳥しば

鳴く」(六・九二三、九二五「山部宿祢赤人作歌_一)

「いさなとり 浜辺を清み」(六・九三一「車持朝

臣千年作歌_一)

「見さくも著し 清き白浜」(六・九三八「山部宿

祢赤人作歌_一)

「川近み 瀬の音ぞ清き、」布当の野辺を清みこそ、

「山高く川の瀬清し」「落ち激つ 瀬の音も清し」(六・

一〇五〇、一〇五一、一〇五二、一〇五三「讚_二久
迹新京_一歌_一)

「山高み 川の瀬清み」(六・一〇五九「春日悲_二傷

三香原荒墟_一作歌_一)

「川見れば さやけく清し」(十三・三三三四「雑
歌_一)

「出立ちの 清き渚に」(十三・三三〇二「相聞_一)

三、旅中での土地賛めとして用いられているもの

「白砂 清き浜辺は……清き白浜」、 「浜清み浦う

るはしみ」(六・一〇六五、一〇六七「過_二敏馬浦_一

時作歌_一)

「山川清み」(七・一一三二「芳野作_一)

- 「宇治川波を清みかも」(七・一一三九「山背作」)
「浜を見れば清しも」(七・一一五八「撰津作」)
「三方の海の浜清み」(七・一一七七「羈旅作」)
「飽の浦の清き荒磯を」(七・一一八七「羈旅作」)
「浜清み磯に我が居れば」(七・一二〇四「羈旅作」)
「浜の清けく」(七・一二三九「羈旅作」)
「吉野川清き川原を」(九・一七二二「元仁歌」)
「清き川瀬を見るがさやけさ」(九・一七三七「兵部川原歌」)
「月読の光を清み」(十五・三五九九「乗船入海路上作歌」)
「山川の清き川瀬に」(十五・三六一八「安芸国長門嶋泊儀辺作歌」)
「月読の光を清み」(十五・三六二二「従長門浦舶出之夜仰観月光作歌」)
「浜清き麻里布の浦に」(十五・三六三二「周防国玖河郡麻里布浦行之時作歌」)
- 「玉敷ける清き渚を」(十五・三七〇六「竹敷浦舶泊之時各陳心緒作歌」)
「宇奈比川 清き瀬ごとに」(十七・三九九一「遊覽布勢水海賦」)
「継ぎて見に来む清き浜辺を」(十七・三九九四「敬和遊覽布勢水海賦」)
「和遊覽布勢水海賦」)
「片貝川の 清き瀬に」、
「片貝の川の瀬清く行く水の」(十七・四〇〇〇、四〇〇二「立山賦」)
「落ち激つ 清き河内に……行く水の 音も清けくは」(十七・四〇〇三「敬和立山賦」)
「饒石川清き瀬ごとに」(十七・四〇二八「鳳至郡渡饒石川之時作歌」)
「浜清く 白波騒き」(十九・四一八七「六日遊覽布勢水海作歌」)
「藤波の影成す海の底清み」(十九・四一九九「十二日遊覽布勢水海 船泊於多姑湾望見藤花各述懷作歌」)

以上、題詞によってみたものだが、歌の内容からいつて、

かはづ鳴く清き川原を今日見てはいつか越え来て
見つつ偲はむ（七・一一〇六「詠川」）

のように、題詞に明示されていないが、旅中にあつてのものとみなすことができるものもある。これら行幸、旅中の例は、二例を除いて（「野辺」一〇五一、「月の光」三五九九、三六二二）、すべて川と海——水の清らかさ——をあらわさんがために用いられているものであり、他の地において、水が澄んで透き通った清らかさを歌うことによつて、その地を賛めたたえる表現として定着したものといえる。

行幸、旅中での歌とはいえないが、その他のものを見ると、

「月夜良し川の音清し」（四・五七一）「大宰帥大伴
卿被_レ任_レ大納言_レ臨_レ入京之時_レ府官人等餞_レ卿筑前国
蘆城駅家_レ歌」（一）

「清」から「不清」へ

「佐保の川門の清き瀬を」（四・七二五）「大伴宿祢
家持贈_レ娘子_レ歌」（一）

「ゐで越す波の音の清けく」（七・一一〇八）「詠河」

「この古川の清き瀬の音を」（七・一一一一）「詠河」

「佐保川の清き川原に」（七・一一二三）「詠鳥」

「清き瀬に千鳥妻呼び」（七・一一二五）「偲故郷」

「落ち激つ走井水の清くあれば」（七・一一二七）「詠
井」

「底清み沈ける玉を」（七・一一三八）「寄玉」

「天の川川の音清し」（十・二〇四七）「七夕」

「三輪川の清き瀬の音を」（十・二二二二）「詠河」

「玉くせの清き川原に」（十一・二四〇三）「正述心
緒」

「庭清み沖辺漕ぎ出づる」（十一・二七四六）「寄物
陳思」

「庭」は漁場としての海面

「洪谿の清き磯回に」（十七・三九五四）「八月七日
夜集_二于守大伴宿祢家持館_一宴歌」

夜集_二于守大伴宿祢家持館_一宴歌

「泉川 清き川原に」(十七・三九五七「哀傷長逝之弟歌」)

「射水川 清き河内に」(十七・四〇〇六「入京漸近悲情難撥述懷」)

「行く川の 清き瀬ごとに」(十七・四〇一一「思放逸鷹夢見感悦作歌」)

「飛鳥川川門を清み」(十九・四二五八「十月廿二日於左大弁紀飯麻呂朝臣家宴歌」)

「松蔭の清き浜辺に……清き浜辺に」(十九・四二七一「十一月八日在於左大臣橋朝臣宅肆宴歌」)

と、川、川原、浜、海あるいは水の音を賛美する表現として用いられ、万葉集において、清澄な水、水辺は絶対的な賛美表現としてあった。この発想は、柿本人麻呂の吉野離宮賛歌に始まり、その後の宮廷歌人たちが川や浜の清らかさを主想として歌い継いできたものといえるが、万葉歌人たちは長く、水の賛美表現として「清し」を不動のものとして受け継いできたといっ

てよい。さらに水の清澄をあらわす「清し」が、水の音をも含めて「清し」と詠ずるようになってくるのはうなづかれる(五七二、一〇〇五、一〇三五、一〇五三、一一〇八、一一一一、二〇四七)。これらは、どちらかというところ、後期万葉のものにみえることから、より広がった意味をもつようになった結果の表現であろう。

また、水の清澄を形容するだけでなく、水以外の自然の形容、「あしひきの清き山辺に」(七・一四一五「挽歌」)、「秋風の清き夕に」(十・二〇四三「七夕」)、「吾の松原清からなくに」(十・二一九八「詠黄葉」)、「神奈備の 清きみ田屋の」(十三・三三二二三「雑歌」)もある。他には、「ますらをの 清きその名を」(十八・四〇九四「賀陸奥国出金詔書歌」)、「あたらしき清きその名そ」(二十・四四六五「喩族歌」)、「清きその道またも会はむため」(二十・四四六九「臥病悲無常欲修道作歌」)、「言清くいたくも言ひ」

(四・五三七「高田女王贈_二今城王_一歌」)は、抽象的なものに対して清いと形容するものである。なお、この他に月を形容する「きよし」の一群があるが、それらについては後述する。

二

次に「さやけし」について見ていきたい。派生語の副詞「さやに」、「(ま)さやかに」もあるがここでは形容詞に限ってみていく。

一、行幸で用いられるもの

「射る形的形は見るにさやけし」(一・六一「舎人娘子從駕作歌」)

「川からし さやけくあらし」、「象の小川を……

さやけくなりけるかも」(三・三一五、三一六「暮

春之月幸_二芳野離宮_一時中納言大伴卿奉_レ勅作歌」)

「山川を 清みさやけみ」(六・九〇七「養老七年

癸亥夏五月幸_二于芳野離宮_一時笠朝臣金村作歌」)

「清」から「不清」へ

「宜しなへ 見ればさやけし」(六・一〇〇五「八年丙子夏六月幸_二于芳野離宮_一之時山部宿祢赤人_レ詔作歌」)

六一番歌を除いて、川、水の聖地、吉野の宮をたたえる表現として用いられている。吉野の宮、吉野の山川の見た目のさわやかさ、すがすがしさ、吉野の川の音のさわやかさを「さやけし」と表現したものである。やはり、水の清らかさ、水の音のすがすがしさの表現しとて用いられたものといえる。「川見れば さやけく清し」(十三・三三三四「雑歌」)は、明確ではないが、歌の内容からいって、伊勢行幸の際の歌とみなし得、これも伊勢の川の賛美表現として用いられている。

二、行幸に準ずる場で用いられるもの

「秋の夜は 川さやけし」(三・三三二四「登_二神岳_一

山部宿祢赤人作歌」)

「久迹の都は山川のさやけき見れば」(六・一〇三

七「十五年癸未秋八月十六日内舍人大伴宿祢家持
讚久迹京「作歌」)

また、

「川見れば 見のさやけく」(二十・四三六〇「陳
私拙懐」)

は行幸に準ずる歌とはいえないが、兵部少輔であった家持が防人の出立地である難波を賛め称えた表現である。これらについても、前と同様とみなしうる。また、行幸とはいえないが、旅中であって、その地の視覚、聴覚を通して清明なることを賛美性をもって「さやけし」と表現されるものとして、

「能登瀬川音のさやけさ激つ瀬ごとに」(三・三一
四「波多朝臣小足歌」)

「渚には あぢ群騒き 島回には 木末花咲き こ
こばくも 見のさやけきか」(十七・三九九一「遊
覽布勢水海「賦」)

「行く水の 音もさやけく」(十七・四〇〇三「敬

和立山賦」)

「寄せ来る波の音のさやけさ」(七・一一五九「撰
津作」)

「寄せむと思へる磯のさやけさ」(七・一一〇一「羈
旅作」)

「清き川瀬を見るがさやけさ」(九・一七三七「兵
部川原歌」)

「うべも鳴きけり川をさやけみ」(十・二二六一「詠
蝦」)

「吉野川音のさやけさ」(九・一七二四「嶋足歌」)
などもあげることができ、これらにも、水の視覚、聴
覚に訴えるさやけさを歌い、賛美表現として機能して
いる。

「かはづ鳴く瀬のさやけくあるらむ」(三・三五六「上
古麻呂歌」)

「細谷川の音のさやけさ」(七・一一〇二「詠河」)
「落ち激つ瀬をさやけみと」(七・一一〇七「詠河」)

「いざ率川の音のさやけさ」(七・一一一二「詠河」)から、「さやけし」は行幸や旅中の歌に限らず水の音のすがすがしさを賛える表現として固定した表現であるといえる。また、「妻呼ぶ鹿の声のさやけさ」(十・二一四一「詠鹿鳴」)は水の音に限らないが、音のさわやかさがより広い意味で用いられたものといえよう。

臥病悲「無常」欲「修道」作歌二首

うつせみは数なき身なり山川のさやけき見つつ道を尋ねな(二十・四四六八)

は、山川のさやけさに仏道のさやけさを暗示したもので、「さやけし」が实景の形容だけでなく概念化してさまを示している。また、「古ゆさやけく負ひて来にしその名そ」(二十・四四六七「喩族歌」)は、「きよし」の場合にもみえたように抽象的なものを形容する、家持特有の用法である。

「さやけし」にも「きよし」の場合と同様に月を形

容する一群があるが、それらについては次に述べる。

三

「きよし」「さやけし」は自然を賛美する表現、特に水の清澄をあらわす語として、万葉集では大きな位置を得てきた。「きよし」「さやけし」は自然を賛美する表現としてもっとも高い理念として万葉集ではその地位を獲得してきたといつてよい。この「きよし」「さやけし」は、月を形容する語としても万葉集では大きな位置を得ていることが次の諸例からいえる。

一、さえぎるものなく照る月

「狐高の野辺さへ清く照る月夜かも」(七・一〇七)

○「詠月」

「雨はれて清く照りたるこの月夜」(八・一五六九「大伴家持秋歌」)

「ひさかたの月夜を清み」(八・一六六一「紀小鹿女郎歌」)

「清」から「不清」へ

「今日の夕月夜清く照るらむ」(十・一八七四「詠月」)

「清き月夜に雲なたなびき」(十一・二六六九「寄物陳思」)

「まそ鏡清き月夜の」(十一・二六七〇「寄物陳思」)

「まそ鏡清き月夜に」(十七・三九〇〇「十年七月七日之夜独仰天漢聊述懷」)

「この月は妹が庭にもさやけかりけり」(七・一〇七四「詠月」)

「天雲はれて月夜さやけし」(十・二二二七「詠月」)

二、夜、何かを見るため(照明として)の月

「まそ鏡 清き月夜に ただ一目 見するまでに

は」、「望ぐたち清き月夜に」(八・一五〇七、一五〇八「大伴家持攀橘花贈坂上大嬢歌」)

「萩の花咲きのををりを見よとかも月夜の清き」

(十・二二二八「詠月」)

「ひさかたの清き月夜にここだ散り来る」(十・二

三三五「詠花」)

「夜渡る月のさやけくはよく見てましを君が姿を」

(十二・三〇〇七「寄物陳思」)

三、夜の宴の月

「花の庭清き月夜に見れど飽かぬかも」(二十・四四五三「八月十三日在内南安殿肆宴歌」)

「もしきの大宮人の罷り出て遊ぶ今夜の月のさやけさ」(七・一〇七六「詠月」)

四、船出、船旅の明かりとしての月

「月読の光を清み神島の磯回の浦ゆ舟出す我は」(十

五・三五九九「乗船入海路上作歌」)

「月読の光を清み夕なぎに水手の声呼び浦回漕ぐかも」(十五・三六二二「従長門浦船出之夜仰觀月光作歌」)

「わたつみの豊旗雲に入り日さし今夜の月夜さやけかりこそ」(一・一五「中大兄三山歌」)

五、夜道を照らす月

「わたつみの豊旗雲に入り日さし今夜の月夜さやけかりこそ」(一・一五「中大兄三山歌」)

五、夜道を照らす月

五、夜道を照らす月

「月読の光はきよく照らせれど」(四・六七)「和歌」

きよく、さやけく照る月は、そのものが賛美の対象であり、夜、花やいとしい人を照らす月、肆宴や船出、船旅の照明として夜を照らす月は、人々の生活に欠くべからざるものであり、美的対象としても尊重されるものであった。こうした月は、清澄であればあるほどよいのであり、「きよし」「さやけし」は月の清澄をあらわす的確な表現として用いられた。ここでも「きよし」「さやけし」は、賛美表現として定着したものと違ってよい。ただし、次の歌の「きよし」となると、多少の微妙さが出てくる。

悲別歌

久にあらむ君を思ふにひさかたの清き月夜も闇の夜に見ゆ (十二・三二〇八)

同趣の歌に「照る月を闇にみなして泣く涙衣濡らしつ乾す人なしに」(四・六九〇)「大伴宿祢三依悲別歌」)、「この言を聞かむとならしまそ鏡照れる月夜

も闇のみに見つ」(十一・二八一)「問答」。ただし、これらの歌には「照る月」に「きよし」「さやけし」の形容はない)がある。これらの歌の「清き月夜」、「照る月」自体、好ましくないものとして歌われているわけではなく、「清き」月に対する肯定的な価値観には変わりはないが、別れを悲しむ歌や恋人と別れている歌では、歌い手の心象を反映してあたかも「闇の夜」のように感じられると歌っていて、清く澄み渡る月も、清明な月そのままに享受されない。心象が反映されると、清明に照りわたる月も、清明なものとして見難くなるのである。

月は常に清く、清明に照るわけではない。万葉集の理念として、「きよし」「さやけし」が、山川、川、月を賛える表現として追求されてきたものなら、清く、清明には照らない月はどう受けとめられたのであろうか。

間人宿祢大浦初月歌二首

倉橋の山を高みか夜隠りに出で来る月の光乏しき

(三・二九〇)

詠月

海原の道遠みかも月読の光少なき夜はふけにつつ

(七・一〇七五)

まそ鏡照るべき月を白たへの雲か隠せる天つ霧か

も(七・一〇七九)

詠月

春されば木の木暗の夕月夜おほつかなしも山陰に

して 一に云ふ「春されば木暗多み夕月夜」(十・

一八七五)

さ夜ふけば出で来む月を高山の峰の白雲隠すらむ

かも(十・二三三二)

問答

木の間より移ろふ月のかげを惜しみ立ちもとほる

にさ夜ふけにけり(十一・二八二一)

詠月

春されば木の木暗の夕月夜おほつかなしも山影に

して一に云ふ「春されば木暗多み夕月夜」(十・

一八七五)

十二月十八日於「大監物三形王之宅」宴歌三首

うちなびく春を近みかぬばたまの今夜の月夜霞み

たるらむ(二十・四四八九)

詠「霍公鳥并藤花」一首并短歌

朝飛び渡り 夕月夜 かそけき野辺に 遙々に

鳴くほととぎす(十九・四一九二)

これらの歌には、「きよし」「さやけし」で形容さ

れる月のような清澄感、明朗さ、力強さはないが、否

定的に歌われるものではない。清明ならざる月、おほ

ろな月も美の対象として歌われるものだが、どこか陰

影をおび、霞むおほろな月は抒情性を醸し出ている。

雲間からおほろげに照る月が序詞として「おほほし

く」を引き出す歌がある。

寄物陳思

雲間よりさ渡る月のおほほしく相見し児らを見む
よしもがも（十一・二四五〇）

「寄」物陳「思」のこの歌は、当然のことながらおぼろな月の景を歌うのでなく、おぼろな月の景から導き出された「おほほしく」が「相見し」を形容する働きに転化している。おぼろな月の景を歌うだけでないところが上述の歌々とは異質であるといえるが、おぼろさが即心象表現に至っているものではない。

同坂上大嬢贈「家持」歌一首

春日山霞たなびき心ぐし照れる月夜にひとりかも
寝む（四・七三五）

大伴坂上郎女月歌三首

ぬばたまの夜霧の立ちておほほしく照れる月夜の
見れば悲しさ（六・九八二）

春日山に霞がたなびている、とすれば月はおぼろに照っている。「心グシは心が晴れ晴れしない意。この句は『照れる月夜』を見て受けた印象を以て誘導語と

「清」から「不清」へ

した情意性の連用修飾格。」（『万葉集全注』巻第四）との指摘のように、おぼろに照る月は晴れ晴れしない心を誘発する。夜霧が立ちこめ月がおぼろに照っている。夜霧によっておぼろに照る月を見てみると悲しい心が起こる。「景と情との融合する表現として、本格的に用いられたものは他にない。」（『万葉集全注』巻第六）といわれるように、おぼろな月の景が悲しい心を誘い出す集中の新しい表現といえる。この二首の歌は、「きよし」「さやけし」なる景、「きよし」「さやけし」なる月がほぼ絶対的な景の賛美表現として営々と歌われてきた万葉集の歌に変革をもたらした歌といつてよいだろう。

結

「きよし」「さやけし」なる景、「きよし」「さやけし」なる月が賛美表現として定着していったわけだが、おぼろな景、月はそれらとは違った趣を醸し出す

風情になっている。おぼろな月については述べてきたが、おぼろな景についてはここでは触れてこなかった。が、例えば、「春草の しげく生ひたる 霞立ち 春日の霧れる 或は云ふ『霞立ち 春日か霧れる 夏草か しげくなりぬる』 ももしきの 大宮所 見れば 悲しも 或は云ふ『見ればさぶしも』」、「楽浪の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも」(一・二九、三一「過「近江荒都」時柿本朝臣人麻呂作歌」)などを見ると、おぼろな景、淀む水は悲しみや慕情を誘うもので、おぼろな月同様、「きよし」「さやけし」景の明るさとは違った抒情がある。

おぼろな月が単に叙景として歌われるだけでなく、おぼろな心、晴れやらない心を誘発するものとして歌われるようになったのは、大伴坂上大嬢の歌(四・七三五)、大伴坂上郎女の歌(六・九八二)に至ってからである。大伴坂上大嬢の歌は大伴坂上郎女の影響下にあることは充分考えられるから、こうした発想は大

伴坂上郎女によるといつてもよいだろう。

「きよし」「さやけし」月が賛美表現として力強さをもつて詠じられてきた歴史に、清明には照らない、おぼろな月が晴れやらぬ心を誘い出す、新しい抒情を形成し、新しい表現を生み出していったといつてよいだろう。「きよし」「さやけし」の表記の多くが「清」であったわけだが、大伴坂上郎女の「おほほしく」(六・九八二)が「不清」という文字によって表記されていることは、「清」を意識し、その対局にあるものとして「おほほしく」を位置づけ「不清」と表記したものだと考えてよいだろう。「清」から「不清」へ、それは、自然の賛美表現から抒情歌の形成の道程といえる。

「きよし」については、高木市之助氏の「万葉集に於ける清なるもの」(『吉野の鮎』)、中西進氏の「清き河内」(『万葉集の比較文学的研究』)、上述の高野正美氏の「新しい自然の発見」(『万葉集作者未詳歌の研究』)などの先行論がある。今、それら先行論

の十分な検討を重ねないままに、自分自身の研究ノートとして述べてみた。

「清」から「不清」へ